



TITLE:

日光に生息するニホンザルの分布 と生態:ニホンザル保護管理の立場 から(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果)

AUTHOR(S):

常田, 邦彦

CITATION:

常田, 邦彦. 日光に生息するニホンザルの分布と生態:ニホンザル保護管理の立場から(Ⅲ 共同利用研究 2.研究成果). 霊長類研究所年報 1976, 6: 37-38

ISSUE DATE:

1976-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162704>

RIGHT:

階層構造、樹冠投影図が記録され、胸高直径、樹高はひきつづいて測定対象とされるものである。

森林施業は林冠層を疎開させ、林床をかなり攪乱する。林内環境の変化が植生にどのような影響を与えるのか。下層植生が陽性化するのは一時的なものかどうか。上層植生への影響は樹種交代、優占種の交代にまでおよぶのかどうか、植生の回復過程はどのような経過をたどるのか、などの点が各施業区の永久調査プロットのくりかえし調査によってあきらかになるはずである。

今年度は継続調査の一環として、データの蓄積過程にある。前年度調査の結果とくらべて、樹高、胸高直径の測定値から生長量を算定するには、測定精度が十分でない。さらに調査をつづける必要がある。

ニホンザルの生息域内では、上述の施業のほか、皆伐による人工林化もすすめられている。地域内全体にわたる植生配置のありかた、施業の進行にともなう変化の動向を予測することも重要な課題となるであろうことは疑えない。ニホンザル行動範囲の確実な推定ができるのをまけて、この点に関する考察にも着手しなければならないと考える。

箱根地域個体群の分散について

○	村松 正敏 (マカック研究会)
	田 中 進 (同上)
	福田 史夫 (同上)
	小林 紀子 (同上)
	岩淵 幸子 (同上)

昭和49年度、50年度の共同利用研究の報告をする。49年度は群れからの個体の分散をそれまでの継続調査として年次変動の追跡を、50年度は群れの遊動時の広がりや周年変化を知る目的で調査した。なお地理的変異の一環として、合わせて体重の測定を実施した。

方法：いずれも個体識別による直接観察による。

調査結果：(1) 群れからの個体の分散。1975年11月までの過去10年間に調査地域内に観察されたオトナのオスは106匹であった。群れに所属する数は常時平均10匹で、群れの大きさ、個体数変化に相関しなかった。5群中2群に生まれたオスの1歳までの生存率は63%、そのうち2匹を除く他の63匹はすべて出身群を離れ、他の近隣群に加入した率は73%であった。なお離脱オスのうち2匹は60km離れた伊豆半島伊豆群に加入していた。

(2) 遊動時の広がり。例年通り冬期はコンパクトな集まりをつくり、わずかに配偶関係による小さな集まりが群れから離れた。オスグループは主群に最も接近した。春期はオスグループのみがやや主群から離れがちだった。夏期、特に出産期に群れは2つに分節化する傾向に

あった。分節グループ間隔は1kmにも達した。オスグループはほとんど独立行動をとった。秋期は分節化も夏期ほどではなかったが例年よりまとまりを欠く集まりをつくっていた。

(3) 体重。オトナのオスは12kg平均、メスは9kg平均の値を得た。年齢毎の比較では、6歳と7歳、7歳と8歳が体重差が大きく、メスでは4歳と5歳が最も体重差があった。

<考察>(1) すべてのオトナのオスは群れ生活と単独生活をする。それぞれの生活期間の比は1対1である。その結果多くの群れでは群れ社会性比が1対1になるとおもわれる。

(2) 群れの分節化には交尾期の配偶者同士からなる小グループと、出産期の親密な同士からなる大分節グループが観察されていて、大分節グループの一方は30匹平均で安定していた。この傾向は、オトナのメスもオトナのメス同様10匹前後の安定したまとまりをもつ傾向を示唆している。オスとメスの体重からみた成長期は2年の差異があると考えられる。

なお今回の報告に示された数値は、研究グループの原データが大部分未整理のため、すべて村松による。

日光に生息するニホンザルの分布と生態

—ニホンザル保護管理の立場から—

○ 常田 邦彦 (東京農工大・農)

(1) 研究の目的

ニホンザル地域個体群の分布の現状とその歴史的変遷を明らかにし、あわせて環境利用等に関する生態調査をおこなう。

(2) 研究の計画

イ) 日光市、栗山村、足尾町について聞き込みによる分布調査をおこなう。

ロ) 表日光地城について毎月入山し、直接観察およびフィールドサインのチェックによる生態調査をおこなう。

ハ) イ)、ロ)と関連して土地利用の変遷を調査する。

(3) 研究の経過

哺乳類分布研究会による関東地方の中、大型哺乳類の分布調査と協力し、昭和50年8月14日～8月23日の10日間、日光市、栗山村、足尾町およびその周辺地域について、聞き込みによる分布調査を実施した。表日光地城については、昭和50年7月28日～7月31日の4日間および昭和51年1月7日～1月9日の3日間、生態調査をおこなった。また、土地利用の変遷を知るために、表日光地城の航空写真を購入し、あわせて関係官庁より資料を蒐集した。これらの結果は現在整理中である。

(4) 研究の成果

日光市、栗山村、足尾町におけるニホンザルの分布の現状および明治時代以降の変遷の概要がほぼ明らかとなった。また、表日光地城については、環境利用の季節的变化およびここ数年間における群れの利用地域の変化に関する資料が蓄積されたが、予算不足により十分な調査はおこなうことができなかった。これらの成果の一部は、雑誌にほんごる特別号に発表する予定である。

(6) 研究の考察、反省

今回調査した地域においては、過去に hunting pressure があったものの、比較的最近まで自然環境が保たれてきた。その結果、日光市、栗山村、足尾町にまたがる連続した分布域が残されてきたものと考えられる。この分布域はさらに福島県、群馬県、新潟県へ続くものと考えられ、かなり大規模な地域個体群の存在が予想される。しかし、この地方においても、hunting pressure や各種開発に伴う生息環境の変化によって、一部地域での群れの消滅や、表日光地方に見られるような群れの利用地域の変化がおこっている。

今後、調査地域を拡大し、分布域の輪郭を把握すると同時に、分布とその変化に影響を与えている要因の分析を重点的におこなう予定である。

房総丘陵のニホンザル野生群の遊動生活

Q

高杉 欣一（東大・農）

小金沢正昭（東農工大・農）

仲 真 悟（千葉大・理）

野生群の生活実態を明らかにするために、元清澄山地区において、昨年度の経験にもとづき、本年度は、方法上いくつかの点を改良し可能なかぎり連続観察するように試みた。

1975年11月9日～24日のべ113名によっておこなわれ、前半に野生群の探索・対象地域の検討・トランシーバーのテストなどをおこない、16・17・18・20日の4日間のべ30時間にわたって、とり囲み法による連続観察をおこなった。

とり囲み法は、2・3人組の調査班を数個野生群をとり囲むように配置し、トランシーバーで相互に連絡しながら、各班で5分毎に姿・物音・声などの観察事項を記載し、同時に5千分の1地形図に観察地点を記入することを骨子としている。そして、対象群の周辺に2・3の班を配置し、対象群に隣接又は接近してくる他の群れ又は個体をチェックした。

この方法では、観察されたすべての事実を記載することが難しいため、観察事項別に記載法の検討をする必要がある。すなわち、記載法の簡略化・統一化・記号化については、かなりの工夫の余地がある。

資料のとりまとめにあたっては、同一事項の重複観察のチェック、観察地点の確認、記載の表現の不統一と観察精度の不統一のチェック等をあらかじめおこない、姿・声・物音などの観察事項別に日周変化を調べ、観察された限りの野生群の空間的ひろがりの日周変化をとりまとめた。

資料は、目下とりまとめ中であるが、同様の調査を各季節にわたっておこないたいと考えている。

研究 成 果

1. 福田喜八郎・仲真悟・小金沢正昭・渡辺隆一（印刷中）。1975年秋季房総丘陵ニホンザル一斉調査報告；とり囲み法による連続観察について。
2. 仲真悟・福田喜八郎・1976、とり囲み法によるニホンザル野生群の連続観察、第20回ブリマーテス研究会。

ニホンザル地域個体群の骨格上の変異

○

高杉 欣一（東大・農）

岩野 泰三（東大・理）

小金沢正昭（東農工大・農）

本研究のための骨格標本は、地域個体群の骨格上の変異を論じる上では極めて貴重なものであるため慎重に整理を進めてきたが、大量処理が不可能なため、なお約3割が未整理である。ここでは標本の由来と構成を紹介し、埋葬遺体の発掘作業について簡単に経過報告しておく。

標本は、千葉県高岩山の天然記念物指定地域のニホンザルT-I群の一部と富津市豊岡の高岩山自然動物園で餌付けられていたニホンザルT-III群の一部、計78体の遺体からなる。このうちT-I群の個体は、1973年3月27日に捕獲され、約半年間高溝の吉田方に収容され、高岩山自然動物園に移管されたもので、移管直後T-III群とのケンカで死亡したもの、および翌年発生した流行病で大量死したものからなる。この流行病は、隣接するT-III群に蔓延し同じく大量死を惹起した。それに、1974年中に他の事由により死亡した若干のT-III群の個体を含む。

発掘作業は、1975年3～4月にのべ109人を投入しておこなわれた。遺体は動物園内の一隅、7.8m×3.5m程の区画内の3本のトレンチの深さ0.5～1.5mの間に埋葬されていた。発掘した遺体は、ニホンザル78体の他、タイワンザル(?)、ウサギ、鳥、各一匹であった。

ニホンザルの遺体のうちT-III群のオス第1位（三代目次郎長）以外は、所属群不明である。しかし個体の区別は比較的はっきりしていたので、埋葬状況のスケッチ・写真をとりながら、なるべく個体別に白骨化ないし白ロウ化した遺体を収容・包装した。持ち帰られた遺体は、ひとつひとつの骨の個体別を検討しながらひきつづき整理中である。